

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿

—— 第六帖 (13) 蛩〜蝶 ——

福田 智子

本稿は、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿——第六帖(9) 芹  
 青葛——(『社会科学』第四十三卷第四号(通卷一〇一)号、二  
 〇一四年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿——第六帖  
 (10) 朝顔〜葵——(『社会科学』第四十四卷第四号(通卷一〇五  
 号)、二〇一五年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿——第  
 六帖(11) 酢漿草〜若——(『社会科学』第四十五卷第一・二号  
 (通卷一〇六号)、二〇一五年八月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌  
 注釈稿——第六帖(12) 蟬〜鈴虫——(『文化情報』第十一卷第  
 一号(通卷一四号)、二〇一五年一月)の続編として、『古今和歌  
 六帖』第六帖の「蛩」から「蝶」までの題に配されている出典未詳  
 歌、六首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。  
 これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本(『新編国歌大観』の底本)  
 を用い、江戸期の流布本である寛文九年(二六六九) 版本を含めた  
 九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四  
 十三巻第四号に詳述しているので、その概略を記すにとどめる。な  
 お、巻末には、蛩〜蝶の歌(四〇一〜四〇二三番)の別出歌一覧  
 を付す。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。  
 二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則  
 として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重  
 要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本と  
 その略称は次のとおり。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)

○寛文九年版本

略称(寛)

三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

四〇一四(ほたる)

【本文】

さよふけて我がまつ人やいまくるとおどろくまでもてらすほたるか

【校異】なし

【語釈】○さよふけて 世が更けて。 ○おどろくまでも 「お

どろく」は、「今まで意識しなかったことを意識する、はっと気がつく」が原義。ここでは、目が覚める意(「考察」参照)。「……までも」は、副助詞「まで」(事態の及ぶ限界を示す)に係助詞

「も」(詠嘆)が付いたもの。

【通釈】

夜が更けて、私が待っている人が今やって来たかと、目が覚めるほどに明るく照らす螢だよ。

【他出】なし

【考察】

恋人の訪れを待つて深夜となり諦めかけていたところ、明るい光に目覚め、恋人の灯火と思つたら、螢が明るく照らしていたのであったという歌である。そこには、「君待つと我が恋ひ居れば我がやどの簾動かし秋の風吹く」(万葉集・巻四・四九一・四八八・額田王、近江天皇を偲ひて作る歌一首)(万葉集・巻八・一六一〇・一六〇六にも)にも通じる、落胆する女性の姿があろう。

「我がまつ人」という表現は、夙に『万葉集』に「我がやどに咲ける秋萩常にあらば我が待つ人に見せましものを」(万葉集・巻十・二一一六・二一一二)という例があり、同歌は『家持集』一二四番にも見える。また、勅撰集においては、「ことならば折りつくしてむ梅花わがまつ人のきても見なくに」(後撰集・春上・二四・よみ人しらず・題しらず)が初出である。先の万葉歌が、「我がまつ人」の来訪時を想定した詠であるのに対し、この後撰集歌は、「我がまつ人」の来訪はないという前提で詠む。平安期には他にも、「雁のねは風にきほひてわたれどもわが待つ人のことづてぞなき」(寛平御時后宮歌合・九二・左)、「はる日すら我がまつ人のこじとだにいはずはあすも猶たのままし」(貫之集・八三二・源のとしのぶのあそんのよびにおこせたるに、いまままでこむとておそくきければ)、「思ひきやわがまつ人はよそ

ながらたなばたつめのあふをみんとは」(宇津保物語・藤はらの君・七〇・春宮) などがあり、恋歌に限った例ばかりではないが、総じて「我がまつ人」は来ず、それに伴う悲しみを詠んでいる。

また、男性が女性のもとを訪れることをいう「いまく(今来)」という表現も、『万葉集』に「湊入りの葦別け小舟障り多み今来む我を流むと思ふな」(巻十二・三〇一一・二九九八) という歌がある。平安期には、『百人一首』にも採られた素性法師の「今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」(古今集・恋四・六九一・題しらず) をはじめ、「今こむといひてわかれし朝より思ひくらしのねをのみぞなく」(古今集・恋五・七七一・僧正へんぜう・題しらず)、「今こむといひしばかりをいのちにてまつにけぬべしさくさめのとじ」(後撰集・雑四・一二五九・女のはは・人のむこの、今まうでこむといひてまかりにけるが、ふみおこする人ありとききてひさしうまうでこざりければ、あとうがたりの心をとりてかくなん申すめるといひつかはしける)、「うかりけるふしをばすててしらいとの今くる人と思ひなさなん」(拾遺集・恋四・八九九・つらゆき・題しらず) などが散見される。「今来む」のかたがが圧倒的に多い。「おどろく」という語を、目が覚める意で用いた例としては、「夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手にも触れね

ば」(万葉集・巻四・七四四・七四一・更に大伴宿祢家持、坂上大嬢に贈る歌十五首)、「よるとてもねられざりけり人しれずねざめのこひにおどろかれつつ」(拾遺集・恋三・八〇一・よみ人しらず・題しらず)、「卯の花のさけるかきねにやどりせじねぬにあげぬとおどろかれけり」(拾遺集・雑春・一〇七二・重之・屏風のゑに) などがある。当該歌は、詠歌状況によって、恋人を寝ずに待っていたのか、あるいは寝待ちしていたのか、両様の解釈があり得るが、蛍の光の明るさを詠んでいると見れば、やはり後者と見るべきであろう。

結句「てらすほたるか」の類例に、「さみだれやこぐらきやどのゆふざれをおもてるまでもてらすほたるか」(道綱母集・四四・うたあはせに、ほたる) がある。当該歌と同様の明るい蛍の光が歌材となっている。

四〇一五

【本文】

つらゆき

ひるはなきよるはもえてぞながらふるほたるもせみも我が身なりけり

【校異】 ○なき―なく(松・和・羅・林) なく(宮)

【語釈】 ○ひるはなき 蝉が昼間に鳴く意に、自分が昼間は恋のために泣く意を掛ける。 ○よるはもえてぞ 蛍が夜間、炎の

ような光を放つ意に、自分が夜間、恋心が高ぶり胸が熱くなる意を掛ける。「ぞ」は係助詞（強調）。○ながらふる「ながらふ」は、生き長らえる、生き続ける意。○我が身 私自身。自分自身。

【通釈】

昼間は鳴き（泣き）、夜間は燃えることで、生き長らえている。蛸も蟬もまさしく私自身だったのだ。

【他出】なし

【考察】

昼間に鳴く蟬と、夜間に燃えるように光る蛸に、恋に悩む自分自身を重ねた歌である。昼間の蟬、夜間の蛸の対比で、恋の煩悶を詠んだ歌としては、「あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ」（古今集・恋一・五四三・読人しらず・題しらず）が挙げられる。当該歌は、この古今集歌の発想の下に詠まれたものであろう。

「ひる」「よる」を対比した恋歌は、夙に『万葉集』に「あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに音のみし泣かゆ」（巻十五・三七五四・三七三二）という歌がある。また、『古今集』にも、「おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし」（恋一・四七〇・素性法師・題しらず）、「みつしほの流れひるまをあひがたみみるめの浦によるをこそまて」（恋三・

六六五・清原ふかやぶ・題しらず）といった歌が載る。他にも、『寛平御時后宮歌合』に「おもひつつひるはかくてもなぐさめつ夜こそ涙つきずながる」（二七八・左）、「ひとりぬる我が手枕を昼はほし夜はぬらして幾代へぬらん」（一八四・左）の二首の歌が見えるなど、恋歌の詠み方として、ひとつの型であったことがわかる。

結句「我が身なりけり」は、勅撰集においては、「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（古今集・恋一・五一・読人しらず・題しらず）、「人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ」（古今集・恋一・五三四・読人しらず・題しらず）、「ほかのせはふかくなるらしあすかがは昨日のふちぞわが身なりける」（後撰集・恋一・五二五・よみ人しらず・女の人のもとにつかはしける）、「何事を今はたのまんちはやぶる神もたすけぬわが身なりけり」（後撰集・恋二・六五八・平定文・人をいひわづらひてつかはしける）といった用例が見える。部立としては「恋一」が多く、比較的初期の恋歌に見出される。

四〇一六（ほたる）

【本文】

すみとげんいほたるべくもみえなくになどほどもなき身をこが

しげ春

すらん

【校異】 ○なとほともなき身を―程もなき身をなと(和) なと(朱)  
 なき身をなと(宮)

【語釈】 ○すみとげん 「住む」は生活する場所としてそこに居  
 ついて暮らす意に、男性が女性の家に通って夫婦の契りを結ぶ  
 意を込める。「遂ぐ」は、しようと思つていたことを完遂する、  
 成し果たす意。○いほたるべくも 「いほ」は庵。粗末な家。

「ほたる」を隠す。○ほどもなき身をこがすらん 「ほどもな  
 き身」は、螢の身の小ささ、命の短さに、作者自身の状況を重  
 ねる。「身をこがす」は、螢が光る様子を、身を火で焼いて焦げ  
 た状態に見立てた表現に、恋に心を苦しめ、苦悶・焦慮する意  
 を重ねる。

【通釈】  
 ずっと居ついて暮らす住処であるようにも見えないのに、どう  
 して(螢は)、長くは生きられない身を焦がしているのだろうか。  
 (長く添い遂げることができそうもないのに、どうして、残りの  
 人生が長くはない身を、あの人に恋い焦がれて苦しめるのだろ  
 うか。)

【他出】 なし

【考察】

短い命でありながら身を焼いて光を放つ螢に、もう長く生き

られそうもない身でありながら恋に苦悶してしまふ自身の状況  
 を重ねた歌と解した。「ほたる」を物名として詠み込みながら、  
 螢そのものを歌材とした上で、恋心を詠む点に留意されよう。

「ほどもなき身」の例は、『新編国歌大観』を検する限り、当  
 該歌以前には例が見出せない。後の例としては、「ほどもなき身  
 のみこがるるほたるをばひとしれずこそ思ひあはすれ」(相模  
 集・四四九・五月)が挙げられる。螢を詠んだこの歌は、当該  
 歌の影響下に詠まれたものであろう。なお、「ほどもなき身」なら  
 ば、『古今六帖』に、「わがこひはみくらのやまにうつしてむほ  
 どなき身にはおき所なし」(第二・八七〇・山)、「かりしてのほ  
 どなき身にもはしたかのねはなきはらふものにざりける」(第  
 二・一一七八・こたか)の二首の例がある。

「身をこがす」という表現は、和歌においては『古今六帖』が  
 ごく初期の例と見られる。当該歌の他、「あぢきなやいぶきのや  
 まのさしもぐさおのがおもひに身をこがしつづ」(第六帖・三五  
 八六・さしもぐさ)という歌がある。また、『人丸集』に載る  
 「あはぬこひうかりけりとぞおもひぬる身をばこがせどしるしな  
 ければ」(二九七・ひうが)は、「平安中期以後に付加されたこ  
 と明らかな国名を詠みこんだ歌六六首」(『新編国歌大観』「人丸  
 集解題」片桐洋一氏・山崎節子氏)中の一首である。平安中期  
 の例としては、他にも、「をしかたつとやまののばらともすひと

身をのみこがすなにの思ひぞ」(惟規集・一・あるをとこ、やま  
とにて、ともしのひをみて)がある。

四〇二一(くも)

【本文】

つねならぬ身はささがにのやどなれやあまつ空なるたのみかく  
らん

【校異】 ○やとーいと(林・寛)糸(松・和・羅・宮・田・黒)

【語釈】 ○つねならぬ身 無常の我が身。自分自身のはかなさを  
いう。 ○ささがにのやどなれや 「ささがにのやど」は蜘蛛の  
巣。「なれや」は、断定の助動詞「なり」の已然形に助詞「や」  
が付いたもの。文末に用いて、疑問・詠嘆の意を表す。……な  
のだろうか。……なのかなあ。 ○あまつ空なるたのみかくら  
ん 「あまつ空」は、空のように遠い、というところから、はる  
かに高く遠い所、まったく縁がないことをいう。また、「空なる  
たのみ」で、空頼み。頼みにならないことを頼みにすること。  
「たのみかく」は「頼み掛く」で、期待を掛ける、あてにする。  
はるかに高い所に巣を張って獲物が掛かるのを期待する蜘蛛に、  
冷淡な恋人が関心を向けてくれるという、まったくあてになら  
ないことを期待する自身を重ねる。

【通釈】

無常の私自身は蜘蛛の巣なのかなあ。蜘蛛がはるか高くに巣を  
掛けて、獲物が掛かることを期待しているように、私は、あの  
人が振り向いてくれないかと、まったくあてにならない頼みを  
掛けているよ。

【他出】 なし

【考察】

上句で「つねならぬ身」と「ささがにのやど」との共通点を  
問い、下句で、ともに「空なるたのみかく」存在であるという  
答えを提示するという構造の歌である。

「つねならぬ身」のごく初期の用例は、「不常沼 身緒飽沼礼  
者バ 白雲丹シラクモニ 飛鳥佐倍曾トトリサヘン 雁砥声緒鳴カリトネフナク」(新撰万葉集・卷之下・  
三六八)であろう。その後は、『公任集』に「つねならぬ身をぞ  
うらむるならぬより花なしといふ世にこそ有りけれ」(二五・返  
し)、「つねならぬこの身は夢の同じくはうからぬ事をみるよし  
もがな」(二九四・この身ゆめのごとし)といった例が見える。  
とくに後者は、維摩経会十喻の中の一偈であり、身の無常を詠  
む発想の根底を支える思想として、押さえておくべきであろう。  
「ささがにのやど」という表現の平安期の用例は、当該歌の他、  
管見に入らない。ただし、『遍昭集』に、「ささがにのそらにす  
がくもおなじことまたきやどにもいくよかはふる」(一四・ゆふ  
ぐれにくものいとはかなげにすがくをみはべりて、つねよりも

あはれにはべりしかば」という歌があり、蜘蛛の巣を「ささがに」の「やど」と捉えて、そのはかなさを詠んでいる。当該歌の発想の一端を、この遍昭歌に看取することができよう。

なお、「やど」の異文として、底本（桂宮本）と永青文庫本以外の伝本は「いと（糸）」本文を採る。「ささがに」の「いと」の頼りなさは、『後撰集』に「たえはつる物とは見つつささがにのいとをたのめる心ほそさよ」（恋一・五六九・つらかりけるをここに）、「ささがにのそらにすがけるいとよりも心ほそしやたえぬとおもへば」（雑四・一二九五・つらかりけるをとこのはらからのもにつかはしける）といった歌があり、表現類型として定着している。仮名表記では、「やと」と「いと」は一字違いでもあることから、この「ささがにのいと」の表現類型に引かれて、「やど」が「いと」と誤られた可能性もあろう。

四〇二二（てふ）

【本文】

おほえてし（ら）これはたれぞも世の中にあだなるてふにみゆる花かは

【校異】 ○おほえてら—おほえてう（松） ○たれそも—たれそと（宮）

【語釈】 ○おほえてし 底本「おほえてら」。ここでは、「ら」を

「し」の誤写と見て校訂した（「考察」参照）。「おほえ」は「おほゆ」で、心にとどめる、記憶するの意。「てし」は、完了の助動詞「つ」の連用形に、過去の助動詞「き」の連体形がついたもの。過去に動作が完了していることを表わす。 ○これ人物を指し示す語。平安時代には敬意を込めた例が多い。相手の女性を指す。 ○たれぞも 誰なのかなあ。「ぞも」は、疑問の語とともに用いて詠嘆を含む疑問を表す。 ○あだなるてふにみゆる花かは 浮気っぽい蝶にまみえる花だろうか、いや、そうではない。蝶は花から花へと飛びまわる。蝶は男性、花は女性を喩えるとすると、「見ゆ」は、夫婦の契りを結ぶ意を込めるか。「かは」は反語。

【通釈】

私がかつて心にとどめたこのお方は、いったいどなたでしょうかねえ。まさか、世間でいう、浮気性だという蝶にまみえる花ではございませぬ。

【他出】 なし

【考察】

過去に知り合った女性に対して、女性を花、男性を蝶に喩えて、浮気性の男性を相手にするような人がここにいるはずはないと揶揄した、元の男性の立場で詠んだ歌と見た。

初句について、久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕

大辞典』「蝶」の項(久保田淳氏)(平成十一年五月、角川書店)では、当該歌の引用本文として「大江寺」の字を当てる。伊勢国にある「大江寺」を指したもののか。「真言宗、天平中、僧行基ノ開創ニ係ル。延喜ノ時、叡旨ヲ以テ、方七間ノ堂ヲ建立セラシ。」(伊勢名勝志)といい、観音堂であった。当該歌においては、詠歌状況が未詳であることもあり、大江寺との関わりは未だ見いだせない。そこでここでは、「覚えてし」と本文を校訂し、「これ」を修飾すると見た。後考を俟つ。

「たれぞも」の用例は、「くらぶ山こずゑも見えでふる雪に夜半にこえくる人やたれぞも」(新撰和歌・冬・一四八)が早い例であり、続いて、「ふくかぜのころもしらではなすすきそらにむすべる人やたれぞも」(実方集・一七・清涼殿御前のすすきをむすびたるを、たれならんといひて、ないしの命婦のむすびつけさせける)、「しばきこるかまどとやまのうぐひすのこゑきさふるす人やたれぞも」(高遠集・三七四・家のみかしぎの、きこりにやりたりけるに、うぐひすの、すくひたりけるきの枝ありけるを、たてまつれるを見て)、「いそがくれおなじこころにたづねなくにおもひいづる人やたれぞも」(紫式部集・二一・又、いそのはまに、つるのこゑこゑなくを)、「かづらきのたえとたえにしいはばしをしのびにわたる人はたれぞも」(輔親集・六二・女房に藤雑色保男がかたらひたえて、またあらためて、う

ちはしからしのびてかよふをみて)、「何事もこたへぬことと習ひにし人としるしるとふや誰ぞも」(公任集・五四〇・かへり事も聞えて程へてうれふることありて御ふみをきこえてその事いかにときこえければ)などがある。多くの場合、「人はたれぞも」のかたちで、「夜半にこえくる人」「そらにむすべる人」など、その「人」の行為や動作を伴って用いられる。当該歌では、「これ」が指す人物(女性)が何をしているのか明示されないが、指示語「これ」からは、この人物と詠者との距離の近さが窺える。

「あだなるてふ」の用例としては、当該歌よりも後の例になるが、『大斎院前の御集』に「七月、あさぼらけにみれば、をみなへしにおなじいなるてふのなれありくに、つゆとしげし、宰相」という詞書で載る「むすびおくつゆのこころもあるものはないうちとけなるてふかな」(三五五)に対する返歌「つゆおきてあだなるてふをならすこそおなじいなるはなごころなれ」(三五六・進)に見出せる。この歌に詠み込まれる、浮気な蝶を相手にする花という関係は、当該歌の下句に通じよう。

四〇二三(てふ)

【本文】

いへばえにいねばさらにあやしくもかげなるいろのでふにも



有るかな

【校異】なし

【語釈】〇いへばえに「えに」は、動詞「う(得)」の未然形に上代の打消の助動詞の連用形「に」が付いたもの。已然形に助詞「ば」が付いた表現とともに用い、……しようとする……できない、の意。〇あやしくも「あやし」は、普通とは異なる」と判断した対象への感情を表す。変わっている。珍しい。「も」は係助詞で詠嘆的強調。〇かげなるいろのてふ「かげ」は

「鹿毛」と「影」との掛詞か(【考察】参照。「鹿毛」は、鹿の毛色に似た馬の毛色をさし、「黒鹿毛」「白鹿毛」「赤鹿毛」などの種類に分けられる。「影」との掛詞とすると、ここでは「黒鹿毛」の色合いか。

【通釈】

口に出して言おうとすると何と言えはいいのかわからないし、口に出して言わなければ、ますます珍しさが募ることには、鹿毛の色をした黒い影のような色の蝶だなあ。

【他出】なし

【考察】

黒い影のような鹿毛色の蝶を見つけた驚きを詠んだ歌と見た。クロアゲハやオナガアゲハ、ジャコウアゲハ(オス)のような、黒色やこげ茶色のアゲハチョウの類をいうか。

「いへばえにいはねば」という表現は、勅撰集においては、『新勅撰集』に、『伊勢物語』第三十四段にも載る在原業平の「いへばえにいはねばむねにさわがれて心ひとつになげくころかな」(恋一・六三五・業平朝臣・女につかはしける)という一例をかりうじて見出すのみである。また、『新編国歌大観』を検する限り、他には、『古今六帖』の「いへばえにいはねばくるしよのな

かをなげきてのみもつくすべきかな」(第四帖・二〇九八・うらみ)以外、管見に入らない。「いへばえに」ならば、平安中期の例として、「いへばえにふかさおもひはわたつみのかひなしとてもやまれざりけり」(能宣集・三四五・又、おなじひとに)があるが、勅撰集入集はやはり、『新勅撰集』を俟たねばならない。

「かげ」は、ここでは「鹿毛」と「影」との掛詞と見た。「語釈」で指摘したように、「鹿毛」は馬の毛色についていうのが普通であるが、「あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま」(拾遺集・秋・一七〇・つらゆき・延喜御時月次御屏風に)、「むかへくるかひもあるかなせき山のこまひきわたすかげもしるしも」(書陵部本能宣集・一八・八月、こまむかへしてはべるところ)、「はしりゐのみづしたえせずあふさかのせきゆくこまのかげもみえなむ」(尊経閣本元輔集・九・八月十五や、人のいへのいけにふねどもうけて、のりてことひくところ)のように、「影」と掛けて用いることがある。ただし、この「鹿

「毛」という語を、馬以外の生物の色に用いた歌は、他には未だ管見に入らない。

なお、馬の毛の名を「ひさかたのつきげ」「なにはのあしげ」というように歌題に折り込んだ『源順馬名歌合』（康保三年（九六六）開催）という歌合もある。平安中期の人々にとつて、馬の毛色は、色の表現として身近なものだったのであろう。とすれば、「いへばえにいはねばさらにあやしくも」という上句も、馬の毛色をいう「鹿毛」という語で表現されるような色合いの蝶を見つけたことからくる、戸惑いの表現と解することができようか。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一二年春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部である。川内臯子（四〇二五番）、中村志樹（四〇一六番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。その後、これをもとに、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一八年度）の一環として、さらに検討を加えた。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器「eCSA Ver.2.00」を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げる。

『古今和歌六帖』別出歌一覧 — 第六帖、4011～4023番 —

- |                                       |                                |   |  |  |
|---------------------------------------|--------------------------------|---|--|--|
| 4015                                  | 4014                           | 4013  | 4012                                   | 4011   |
| ひるはなきよるはもえてぞながらふるほたるもせみも我が身なりけり（つらゆき） | さよふけて我がまつ人やいまくるとおどろくまでもてらすほたるか | 夕さればほたるよりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき（とものり）         | 夏の夜はともすほたるのむねの火ををしもたえたる玉とみるかな（つらゆき）    | 行くほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ                     |
|                                       |                                | 1-1 古今 562, 2-2 新撰万 69, 3-11 友則 12, 5-4 寛平后 | 5-7 宇多合 24 「くらきよに」 「をしもとけたる」 「たまかとぞ見る」 | 1-2 後撰 252, 3-6 業平 10, 5-1 415 伊勢語 84, 7-2 業平 58 |
|                                       |                                |   |  | ほたる  |
|                                       |                                |   |  | （未詳）   |
|                                       |                                |   |  | （未詳）   |

4016

すみとげんいほたるべくもみえなくになどほどもなき身をこが  
すらん(しげ春)

〈未詳〉

4017

はたおりめ  
かりがねのは風をさむみはたおりめくだまくこゑのきりきりと  
なく

4018

2-2新撰万99「はたおりの」「くだまくおとの」「きりきりと  
する」、5-4寛平后100「雁がねは」「風をさむみや」「くだまく  
音の」「きりきりとする」  
秋くればはたおる虫のあるなへにからにしきにもみゆるのべか  
な

3-19貫之367、1-3拾遺集180、1-3拾遺抄112

くも

4019

いましばとわびにしものをささがにのころもにかけて我をたの  
むる(そとほりひめ)

1-1古今773「衣にかかり」

秋のにおくしらつゆは玉なれやつらぬきとむるくものいとす

ぢ(ふんやのあさやす)

1-1古今225「つらぬきかくる」、2-3新撰和76「つらぬきか

くる」、2-2新撰万382「こりたるつゆは」「つらぬきかくる」

つねならぬ身はささがにのやどなれやあまつ空なるたのみかく  
らん

〈未詳〉

4022

てふ

おほえてらこれはたれども世の中にあだなるてふにみゆる花か  
は

〈未詳〉

4023

いへばえにいへねばさらにあやしくもかげなるいろのてふにも  
有るかな

〈未詳〉

